

日本文学を世界文学として読む

二〇一八年度「文学研究科プロジェクト」成果報告書

世界文学と「地方」	堀 まどか (1)
——野口米次郎とシカゴの詩雑誌『ポエトリ』	
片山廣子の新体詩「あかき貝」について	永井 泉 (18)
——クリステイーナ・ロセッティ『シング・ソング童謡集』との関わり	
『太平記』引用説話の典拠と文脈	大坪 亮介 (32)
——英訳『太平記』の注記を端緒として	
和歌と漢詩	
——平安朝における実例をめぐって	山本 真由子 (44)
芥川龍之介から堀辰雄へ	劉 娟 左 (31)
——『玉書』の受容から見る東西意識	
芥川龍之介「秋山図」など	奥野 久美子 左 (18)
——世界文学としての芥川作品	
『オデュッセイア』の類話における英雄像比較	高島 葉子 左 (1)
——オデュッセウス、百合若大臣、ポイヤウンペ	
あとがき	(i)



Urban-Culture Research Center

大阪市立大学大学院文学研究科 都市文化研究センター

Reading Japanese Literature as World Literature

World Literature and the Local: Yone Noguchi and *Poetry* - a Chicago Journal of Verse

HORI Madoka 1

An Analysis of the poem "A Red Shell (Akaki-kai)" by Hiroko Karayama:

The Influence of *Sing-Song: A Nursery Rhyme Book* by Christina Rossetti

NAGAI Izumi 18

Issues on the Sources and Contexts of the Stories quoted in *Taiheiki*:

Considering McCullough's Notes as a Clue

ŌTSUBO Ryōsuke 32

Waka and Sinitic Poetry: Examples in the Heian Period

YAMAMOTO Mayuko 44

From Ryūnosuke Akutagawa to Tatsuo Hori:

The Orient and the Occident in their Interpretation of *Le Livre de Jade*

LIU JUAN left 31

"Autumn Mountains (*Shūzan-zu*)" by Ryūnosuke Akutagawa:

Akutagawa's Works as World Literature

OKUNO Kumiko left 18

Odysseus, Yuriwaka-daijin, and Poyyaunpe:

A Comparative Study of the Heroic Tales in Ancient Greece, Japan, and Ainu

TAKASHIMA Yōko left 1

**Urban-Culture Research Center,
Graduate School of Literature and Human Sciences,
Osaka City University**

芥川龍之介から堀辰雄へ

—『玉書』の受容から見る東西意識—

劉娟

(要約文) 1867年に、ジュディット・ゴーチエは『玉書』という漢詩訳詩集をもって、西洋人の中の古典中国を描いた。この西洋と東洋をコンプレックスした作品は、後に、芥川龍之介と堀辰雄の関心を引き起こしたことが考えられる。本稿はこの師弟二人における『玉書』の受容を明らかにする。その上で、芥川と堀、二人における「東洋」と「西洋」を見ていく。

はじめに

小説家テオフィール・ゴーチエ (Théophile Gautier, 1811—1872) の娘であるジュディット・ゴーチエ (Judith Gautier, 1845—1917) は、1867年に処女作 *Le Livre de Jade* (『玉書』) を発表した。創作の手を大きく加えたこの漢詩訳詩集は当時のヨーロッパ文壇に大きな反響を呼び起こした。以降、これを一つの濫觴として、西洋では漢詩訳詩集が続出することになる。

『玉書』の影響が世界で広がるなか、日本では、芥川龍之介が「パステルの龍」で『玉書』を紹介するとともに、日本語に訳していることがよく知られている。また、後に芥川の弟子にあたる堀辰雄が未発表の中国古典ノートを残している。それらのノートからも『玉書』受容の一側面を窺い知ることができる。

本稿は、芥川と堀と、それぞれにおける『玉書』の受容を比較することで、堀の中国古典への関心における師芥川の影響を探りながら、二人における東洋と西洋の位置づけを分析する。

1、芥川と *Le Livre de Jade* (『玉書』)

1-1、「パステルの龍」の中の『玉書』

「パステルの龍」は芥川が「上海滞在中、病間に訳したもの」⁽¹⁾ である。二人の女性詩人ジュディット・ゴーチエとユニス・ティッチェンズを簡単に紹介した後、ジュディットの漢詩訳詩集 *Le Livre de Jade* (『玉書』) にある二首の詩「月光」、「陶物の亭」に加えて、ユニス・ティッチェンズの詩集 *Profiles from China* にある三首の詩「夕明かり」、「洒落者」「作詩術」を日本語に訳している。

「パステルの龍」の冒頭には、ジュディットとその訳詩集『玉書』について以下のような一文がある。

【資料1】「パステルの龍」(2)

名高いゴオテイエの娘さん(筆者注:ジュディット)は、カテユウル・マンデスと別れた後、Tin-tun-Ling と云ふ支那人に支那語を習ったさうである。が、李太白や杜少陵の訳詩を見ても、訳詩とはどうも受け取れない。まづ八分までは女史自身の創作と心得て然るべきであらう。

このように、「八分までは」「創作」であるとした『玉書』の中の訳詩二首(「月光」、「陶器の亭」)を、芥川はどのように日本語に訳したのであろうか。それについては拙論(3)で詳しく論じたが、図式化すると以下のようなになる。



つまり、フランス語が堪能ではない芥川は『玉書』の訳詩を直接読んだわけではなく、英語に転訳した *Chinese Lyrics from The Book of Jade* を通して「月光」及び「陶器の亭」を「パステルの龍」に訳した。

1-2、芥川のほかの作品に見られる『玉書』に関する記述

『玉書』の漢詩訳詩について、芥川は「骨董羹」のなかで触れている。

【資料2】「骨董羹」(4)

Judith Gautier が詩中の支那は、支那にして又支那にあらず。葛飾北齋が水滸畫傳の挿畫も、誰か又是を以て如實に支那を寫したりと云はん。さればかの明眸の女詩人も、この短髮の老畫伯も、その無聲の詩と有聲の畫とに彷彿たらしめし所謂支那は、寧ろ彼等が白日夢裡に逍遙遊を恣にしたる別乾坤なりと稱すべきか。人生幸にこの別乾坤あり。誰か又小泉八雲と共に、天風海濤の蒼々浪々たるの處、去つて還らざる蓬萊の蜃中樓を歎く事をなさん。(一月二十二日)

「パステルの龍」は「上海滞在中、病間に訳」されたものとする芥川自身の記述から、1921年4月頃の執筆と考えられる。さらに、その傾倒ぶりの大きな原因として、『玉書』は中国の伝統としての漢詩を西洋の色眼鏡を通して書かれた作品であることがあったと考えられる。

上掲の「骨董羹」のほか、芥川は未発表ノート「澄江堂遺珠関連資料」で『玉書』について触れている。

【資料3】「澄江堂遺珠関連資料」⁽⁵⁾（傍線引用者、以下同）

ノート1、頁30

（前略）

170 Chinese Poems

Arthur Waley

H. A. Giles. (Chinese poetry in English Verse)

Judith Gautier Le Livre de Jade

ノートが書かれた具体的な年月は不明であるが、漢学素養のすこぶる高い芥川が敢えて西洋の書物を通して漢詩を読んでいた一側面を窺うことができる。

なお、ここに芥川はフランス語の書名 *Le Livre de Jade* を記している。が、すでに前節で触れたように、フランス語が堪能ではない芥川は『玉書』のフランス語を直接読んだわけではなく、英語訳の *Chinese Lyrics from The Book of Jade* で読んでいた。それは「パステルの龍」における『玉書』の受容の場合だけでなく、ここにも同じようなことが言えるだろう。

以上は芥川における『玉書』の受容についての一考察である。漢学に堪能な芥川が、敢えて「八分までは」「創作」である洋書を通して「漢詩」を楽しもうとしたのは、漢詩そのものよりも、西洋のフィルターを通した伝統としての東洋に興味を寄せたと考えられる。それは言い換えれば「パステルの龍」というタイトルが示すように、西洋のコンテクスト（「パステル」）で描かれた漢詩（「龍」）の「別乾坤」に芥川が自らを「逍遥」させていたことに他ならない。

さらに、洋書の翻訳を通して漢詩を受容した文学者は、芥川だけではない。芥川から深い影響を受けていた弟子堀辰雄も、後年師である芥川に倣って洋書を通して「漢詩」を読もうとしたことがうかがえる。以下、『玉書』と関連する、堀が洋書で読んだ漢詩について述べていきたい。

2、「パステルの龍」から堀の中国古典ノートへ

前述のように、芥川は漢学素養のすこぶる高い作家の一人である。また、彼を一つの分水嶺として、昭和初期に入ってから、漢学が日本の文壇からほとんど廃れた状態に陥ったことが通説になっている。堀はまさに人々が漢学に見向きもしなくなった時代の最中に生きてきた作家の一人である。彼は最晩年になってからはじめて中国古典に興味を持ちだした。その証拠が、以下の五つの未発表の中国古典ノート⁽⁶⁾である。

- ①「支那古詩（一）」
- ②「支那古詩（二）」

- ③「(杜甫訳詩)」
- ④「(支那古詩抄)」
- ⑤「(花の話・詩経)」

本稿は、ノート③及びノート①を中心に論じていく。

2-1、ノート③「(杜甫訳詩)」の典拠—*Pfirsichblüten aus China* (『中国よりの桃花』)

ノート③「杜甫訳詩」は中判ノートの断片(縦 19.2 cm×横 12.8 cm) 24 枚を横長に用い、その両面に縦書きしたものである。口語体に訳した杜甫の詩 15 首を鉛筆で書いている。

堀の杜甫訳詩ノート(ノート②及びノート③)を翻刻し、堀蔵書を調べた内山氏はこのノートの典拠について以下のように触れている。

【資料 4】内山知也「堀辰雄の《支那趣味》」(7)

(前略) H. Bethge の *Pfirsichblüten aus China* (中国よりの桃花・堀辰雄の命名によれば「支那詞華集」) 全百二十一ページの中で、堀辰雄が朱筆でいちいち原詩を余白に記しているものがあって、それは次の十七首である(後略)。

堀が蔵書のドイツ語書籍 *Pfirsichblüten aus China* に書き込んでいた十七首の原詩のうち、七首はノート③「(杜甫訳詩)」に入っている(8)。

後に、岡本文子氏の研究(9)によって「(杜甫訳詩)」ノートの典拠は *Pfirsichblüten aus China* (『中国よりの桃花』) であることが明確となった。さらに、長谷部剛氏の研究(10)によって、ノートに訳された十五首のうち堀が原詩に辿ることが出来なかった残りの八首の訳詩の原詩が判明した(11)。

さらに、Bethge の *Pfirsichblüten aus China* (『中国よりの桃花』) には、以下のような記述が見られる。

【資料 5】Hans Bethge *Pfirsichblüten aus China* (1922 Ernst rowohlt verlag Berlin)

Die Verse dieses Buches gehen auf die Prosatexte folgender drei Werke zurück: Le marquis d' Hervey-Saint-Denys, Poésies de l' époque des Tang, Paris, bei Amyot 1862; Chi-King ou Livre des vers, traduit pour la première fois en français par G. Pauthier, Paris, bei Maisonneuve 1972; und Le livre de jade von Judith Gautier, Paris, bei Félix Juven o. J.

(拙訳: この詩集は以下の三つの作品に遡ることができる: Hervey-Saint-Denys 侯爵の『唐詩』(パリ出版社 1862); 『詩経』(パリ出版社 1972); および Judith Gautier の『玉書』(パリ出版社)。

Bethge は *Poésies de l' époque des Tang* (『唐詩』) 、*Chi-King ou Livre des vers* (『詩經』) 及び *Le livre de jade* (『玉書』) に拠って *Pfirsichblüten aus China* (『中国よりの桃花』) を訳したことが明らかである。堀の「(杜甫訳詩)」ノートに入っている十五首の杜詩について考察すると、そのもとはそれぞれ以下の本に遡ることができる。

Le Livre de Jade (『玉書』) に拠った詩 (十首)

原詩題目 (堀訳) *Pfirsichblüten aus China* (『中国よりの桃花』) *Le Livre de Jade* (『玉書』)

佳人 (佳人の嘆き)	Klagen einer schönen Frau	La plus belle
寄李十二白二十韻 (李太白に)	An Li-Tai-Po	Envoi à Li-Tai-Pé
野望 (晩歸)	Abendlicher Spaziergan	Promenade le soir dans la prairie
麗人行 (舟上の美人)	Die Frau auf dem Blumenboot	Le Bateau des fleurs
李太白を憶ふ	Sehnsucht nach Li-Tai-Po	A Li-Tai-Pé
秋興八首 其三 (歎き)	Klage	Montée d' automne 三章
秋興八首 其一 (異郷の愁)	Herbst in der Fremde	Montée d' automne 一章
秋興八首 其八 (痛ましき追憶)	Schmerzliche Erinnerung	Montée d' automne 八章
秋興八首 其六 (秋)	Herbst	Montée d' automne 六章
玉華宮 (古城址にて)	In den Ruinen eines alten Schlosses	Le beau Palais de Jade

(注：詩題の配列順は堀の「(杜甫訳詩)」による。)

Poésies de l' époque des Tang (『唐詩』) に拠った詩 (五首)

原詩題目 (堀訳)	<i>Pfirsichblüten aus China</i> (『中国よりの桃花』)	<i>Poésies de l' époque des Tang</i> (『唐詩』)
戲題王宰画山水図歌	Auf ein Bild des	Vers impromptus écrits

(王宰相の畫に題す)	Malers Wang-Tsai	sur une peinture de Quang-tsai
新婚別 (新婦の嘆き)	Die Neuvermählte klagt	La nouvelle mariée
夢李白 (放逐せられし李太白に)	An den verbannten Li-Tai-Po	Le poète voit en songe son ami Li-tai-pè
登高 (秋の逍遙)	Herbstwanderung	Le neuvième jour du neuvième mois, en montant aux lieux élevés
贈衛八処士 (若き日の友に)	An einen Jugendfreund	Offert à Pa, lettré retiré du pays Oey

(注：詩題の配列順は堀の「(杜甫訳詩)」による。)

以上を踏まえ、「杜甫訳詩」ノート of 成立過程を以下のように推定することができる。

杜甫原詩 → *Le Livre de Jade* (『玉書』) OR *Poésies de l' époque des Tang* (『唐詩』) → *Pfirsichblüten aus China* (『中国よりの桃花』) → 堀の「(杜甫訳詩)」ノート

芥川が『玉書』の英語訳を「パステルの龍」に転訳したことに對し、堀は『玉書』を典拠としたドイツ語訳を「(杜甫訳詩)」ノートとして訳している。

2-2、ノート①「支那古詩 (一)」の典拠—*La Flûte de Jade* (『玉笛』)

ノート①「支那古詩 (一)」は大判雑記帳 (縦 23.5 cm × 横 20 cm) に、漢詩原詩七首を鉛筆で横書きに書き込んだものである。緑色の表紙に青鉛筆で「支那古詩」と記されている。ノートは 54 頁であり、七首の詩は 3、4、5、6、7 頁に書き込まれている。また、詩人名の横にフランス語ローマ字表記、及び詩題の横にフランス語訳が見られる。原詩に註が付けられている箇所も認められる。

前掲した内山論から分かるように、*Pfirsichblüten aus China* (『中国よりの桃花』) という堀蔵書には、判明できた原詩十七首を堀がドイツ語訳詩本文の余白に書き込んでいる。堀が *Pfirsichblüten aus China* (『中国よりの桃花』) を読む時、訳詩の漢詩原詩を推定しようとしたことが認められる。そこで、同じように、ノート①「支那古詩 (一)」に見られる作者名及び詩題のフランス語表記 (例：王維 (Wang-wei) ; 「雑詩」 (Nouvelles du village)) が見られることから、堀は何らかのフランス語訳の漢詩を読んだうえで、さらに原詩に辿ろうとし、その判定ができた

ものをノート①「支那古詩（一）」に記したことが言えよう。

堀蔵書においては、中国関係のフランス語蔵書を四冊⁽¹²⁾見つけることができる。それらのうち「支那古詩（一）」の典拠だと考えられるのは *La Flûte de Jade* である。ノートにある七首の漢詩を典拠と対照してみると、以下のようになる。

「支那古詩（一）」	<i>La Flûte de Jade</i>
「過故人荘」（孟浩然）	Idyll (Mong-Kao-Jen) (* <i>Pfirsichblüten aus China</i> (『中国よりの桃花』により))
「田家雜興」（儲光義）	「La maison des Champs」(Tchu-kouang-Hi)
「雜詩」（王維）	「Nouvelles du Village」(Wang-Wei)
「採蓮曲」（王昌齡）	「La Chanson des Nénuphars」(Quang-Tch'oung-Ling)
「春夢」（岑參）	「Rêve」(Tsin-Tsan)
「西宮沈怨」（王昌齡）	「Dans le Palais de L'Est」(Quang-Tch'oung-Ling)
「人日寄杜拾遺」（高適）	「A Tou-Fou」(Kao-Che)

「過故人荘」（孟浩然）との一首のみ *La Flûte de Jade* から確かめることはできない。ほかの六首の詩の題目及び詩人のフランス語表記は *La Flûte de Jade* と一致している。堀は *La Flûte de Jade* を読んだうえで、判定した原詩をノートに記したことは明らかである。「過故人荘」（孟浩然）に関しては、前記のノート③「(杜甫訳詩)」の典拠である *Pfirsichblüten aus China* に収録され、ノート①「支那古詩（一）」に記した詩人名のローマ字表記(「Mong-Kao-Jen」)は、*Pfirsichblüten aus China* にあるものと一致する。また、既述のように、堀は *Pfirsichblüten aus China* にある訳詩の余白に推定できた原詩を十七首書き込んでいる。「過故人荘」（孟浩然）はその十七首の詩のうちに入っている。

堀蔵書のうち、中国関係のフランス語蔵書が四冊あることは前に述べた。が、残りの三冊は何れも唐詩関係のものではない。以上のことから、ノート①「支那古詩（一）」は *La Flûte de Jade* 及び *Pfirsichblüten aus China* を典拠としたことが分かる。また、堀の中国古典へのアプローチの方法としては、洋書から「漢詩」を読んだうえで、さらに原詩に遡ろうとした姿を垣間見ることができる。

さらに、『玉書』の出版状況に関しては、以下のような記述が見られる。

【資料 6】 *Translation in anthologies and collections (19th and 20th centuries)*^(13.)

(前略)There were also intralingual rewritings. The more obvious are *Poèmes de Chine* (1887) by Émile Blémont (1839-1927), *La Flûte de Jade : poésies chinoises* (1920) by Franz Toussaint (1879-1955), and *Autres Poèmes d'après le chinois* (1937) by Paul Claudel (1868-1955).

(拙訳：同じ言語(筆者注：フランス語)で『玉書』を)再創作したものもある。そのうち、より明らかなのはÉmile Blémont (1839-1927)の『中国詩』(1887)、Franz Toussaint (1879-1955)の『玉笛：中国の詩』(1920)、およびPaul Claudel (1868-1955)の『擬中国詩拾遺』である。)

ここで *La Flûte de Jade* 『玉笛』は『玉書』の「interlingual rewritings」(言語間の書替え)に属することが指摘されている。

以上を踏まえ、ノート①「支那古詩(一)」にある『玉笛』を典拠とした部分の成立過程を以下に推定する。

原詩 → “*Le Livre de Jade*” (玉書) → “*La Flûte de Jade*” (『玉笛』) → 堀の「支那古詩(一)」

このように、芥川と堀はそれぞれ『玉書』から転訳した漢詩訳詩集をもとにして、自分の漢詩和訳を作った。二人は同じく漢詩の西洋訳を通して漢詩を日本語にする方法を取っている。しかもその西洋訳はすべて『玉書』に由来するものである。これは決して偶然ではない。次はそのことについて論証する。

2-3、堀と “*Le Livre de Jade*” (『玉書』)

前節では堀の二つの中国古典ノート(③「(杜甫訳詩)」及び①「支那古詩(一)」)は『玉書』を間接典拠としていることを明らかにした。それでは、堀は『玉書』の存在をどれほど把握していたのだろうか。

1929年1月、堀は帝国大学の卒業論文として「芥川龍之介論」を提出した。論では師芥川が自分に与えていた影響にしばしば言及していた。晩年になって堀は再び「芥川龍之介論」を書き直そうとした。その準備として芥川の読書メモを集めた「芥川龍之介の読書」ノートを残した⁽¹⁴⁾。

ノートは二つの部分からなっている。最初の部分は昭和二年から遡り、明治四十三年に至るまでの芥川の書簡で記した読書の内容を芥川のそのままの言葉で記録しており、残りの部分は芥川のエッセイなどで言及した作家や作品名などを書いている。晩年になっても、なお堀の中に「深く根を下ろして」⁽¹⁵⁾いた師の芸術を見直そうとした堀の真剣な姿勢が垣間見える。

この一方、「芥川龍之介の読書」は堀が中国古典を学び出した一つのきっかけになっている⁽¹⁶⁾。

その中には、『玉書』に関わる言及が次の箇所に見られる。

【資料7】 堀辰雄「芥川龍之介の読書」(17)

パステルの龍

[大正十三年]

○Judith Gautier 名高いゴオティエの娘さんは、カチュル・マンデスと別れた後、Tin-tun-Ling と云う支那人に支那語を習ったさうである。が、李太白や杜少陵の訳詩を見ても、訳詩とはどうも受け取れない。まづ八分までは女史自身の創作と心得て然るべきであらう。

【資料8】 堀辰雄「芥川龍之介の読書」(18)

骨董羹

*Judith Gautier の詩集：葛飾北斎の水滸畫傳挿繪

[小泉八雲]

堀は芥川の読書を丹念に集める過程で、ジュディットの『玉書』について触れている。この事実からは、芥川が『玉書』の英語訳の漢詩を読んでいたことに対し、堀は師である芥川から学んで、『玉書』から転訳したドイツ語訳、フランス語訳を通して自分の漢詩訳詩ノートを作ったことが考えられる。

さて、芥川と堀の二人は『玉書』以外にも、洋書を通して中国文学を読んでいたのだろうか？さらに、同じく「西洋」を通して「東洋」を学ぶという方法を取りながらも、二人においてどのような相違性が考えられるだろうか。次はその二点について見ていきたい。

3、芥川から堀へ—洋書で中国古典を学ぶ方法

芥川の蔵書目録を検索してみると、中国関連の洋書は二冊しか見当たらない。以下に挙げる。

蔵書名（作者、出版年月、出版社など）	備考
(1)、Carl Katharine A. “ <i>With the empress dowager of China</i> ” (New York, Century, 1907)	・英語書物
(2)、Tietjens, Eunice “ <i>Profiles from China</i> ” (New York, Knopf, 1919)	・英語書物 ・「パステルの龍」の典拠

さらに、芥川の書簡を調べると、以下の本の名が見られる。

【資料9】 芥川龍之介 大正10年7月12日 西村貞吉宛て書簡 (19)

(前略) 僕お前の所へ Chinese Profiles と云ふ本を忘れたりあの本紀行を書くには入用故東京市外田端四三五僕まで送ってくれ (後略)

書簡の執筆される時期から推測すると、「あの本紀行を書くには入用」の「紀行」とは「上海遊記」のことを指すだろう。直接 *Chinese Profiles* という書名は現存しない。が、芥川が上海滞在中、井川亮やジョオonzから借りた *Profiles from China* を読んでいたことから (20)、ティッチェンズの *Profiles from China* のことを指す可能性が高い。*Profiles from China* は女詩人ティッチェンズが中国での見聞などを中心に記した詩集になり、そもそも紀行文学の性質があるため、芥川の参考にもなるだろう。

一方、芥川の未定稿類を調べてみると、「澄江堂遺珠関連資料」から以下の内容を見つけることができた。

【資料10】 (【資料3】に同じ) 芥川龍之介 「澄江堂遺珠関連資料」 (21)

ノート1、頁30

(前略)

170 Chinese Poems

Arthur Waley

H. A. Giles. (Chinese poetry in English Verse)

Judith Gautier Le Livre de Jade

ここに Arthur Waley 及び H. A. Giles、また前述の Judith Gautier の名を取り上げている。三人とも「Chinese Poems」(漢詩)を訳した欧米の学者や詩人である。Arthur Waley (1889年8月 - 1966年6月)は、イギリスの東洋学者であり、李太白、白樂天、袁隨園などの詩を訳しているほか、*The Tale of Genji* (『源氏物語』)の翻訳者としても有名である。一方、Herbert Allen Giles (1845年12月 - 1935年2月)は、イギリスの中国学者であり、『孫子』や『聊齋志異』の英訳を出しているほか、『華英辞書』の編纂によって知られている。

興味深いことに、Arthur Waley 及び H. A. Giles の名は堀蔵書リストからも見られる(後述)。この「澄江堂遺珠」は佐藤春夫の編纂にかかるもので、これに先立って堀がまとめた「澄江堂句集」に選ばれていない詩などを集めたものである。佐藤春夫の「澄江堂遺珠」編集記録によると、「堀君が冊子第一号及び私書中の詩章は悉くこれを既刊集中に完全に収録しながら、第二号及び第三号よりは完作の趣を具えたるに近きものを僅に数篇しか抄出せず他の大部分はこれを逸した」(22)とある。以上のことから、堀は上掲の芥川の読書メモに触れてい

たことは確実である。ここからも堀における芥川の読書の影響の一側面を窺うことができる。

一方、堀の蔵書目録から中国関係の洋書をすべて抜き出すと、以下のものが挙げられる。

蔵書名（作者、出版年月、出版社など）	備考
(1)、Chavannes & Stein, A <i>Notes on the Ancient Chinese Documents</i> (Reprinted from the New China Review. 1940)	・英語書物
(2)、Giles, Herbert A. <i>A History of Chinese Literature</i> (William Heinemann, 1901)	・英語書物 ・ノート⑤の間接 典拠 ・芥川の読書関連
(3)、Waley, Arthur <i>(The Augustan Books of English Poetry) Poems from the Chinese</i> (Ernest Benn Ltd.)	・英語書物 ・芥川の読書関連
(4)、Bethge, Hans <i>Pfirsichbluten, Nachdichtungen Chinesischer Lyric</i> 「支那詞華集（ベトゲ訳）」 (Ernst Rowohlt Verlag.)	・ドイツ語書物 ・ノート③の典拠 ・芥川の読書関連
(5)、Grube, Wilhelm <i>Gesichte der Chinesischen Literatur</i> (C. F. Amelangs Verlag, 1909.)	・ドイツ語書物 ・ノート⑤の間接 典拠
(6)、Couvreurs, S. J. <i>Cheu King, Sien Hsien</i> (Imprimerie de la Mission Catholique, 1934.)	・フランス語書物 ・ノート⑤の典拠
(7)、Tizac, H. d' Ardenne <i>L' Art chinois classique</i> (Henri Laurens, 1926.)	・フランス語書物
(8)、Toussaint, Franz <i>La flûte de Jade. Poésies chinoises</i> (Edition d' Art, H. Piazza, 1922.)	・フランス語書物 ・ノート①の典拠 ・芥川の読書関連
(9)、Valéry, Paul <i>Commerce</i> 「ヴァレリイ, 陶淵明」 (Rédaction et Administrarion chez L.Giraud-Badin. 1929.)	・フランス語書物 ・堀の書き込みあり

今まで見てきたのは芥川と堀がそれぞれ洋書を通して読んだ中国文学である。

二人の蔵書目録を見ると、堀の中国関係の洋書蔵書が圧倒的に多いことがわかる。芥川は西洋のフィルターを通して東洋を見ることの新鮮味から、西洋人がデフォルメした「漢詩」を楽しもうとした。それに対し、西洋に慣れ親しんできた堀の場合、洋書を通して中国古典を読むことは一つの自然で身近な手段となっている。堀は陶淵明を読むにもヴァレリーのフランス語の解釈をたよりにして真剣に勉強した跡が認められ、『詩経』を勉強する際もフランス語訳をわざわざ原詩の横に記している⁽²³⁾ ことなどからその一側面が窺える。

おわりに

西洋風を好んでいた堀は、漢詩を学ぶのも慣れ親しんできた西洋訳の漢詩から出発している。それは芥川が『玉書』の英語訳の漢詩を読んでいたことに影響を受けたと言えよう。堀は自分の師である芥川に学んで『玉書』から転訳したドイツ語訳、フランス語訳を通して自分の漢詩訳詩ノートを作った。

晩年になっても、やはり師を「冷静に見」ることを通して「自分を冷静に見」⁽²⁴⁾ ようとした堀は、芥川が洋書で「漢詩」を読んでいたことに気づかされた。それは、西洋のモダニズムから出発した堀にとっては、いかにも身近な漢文学へのアプローチであったと言える。堀の中国古典への関心は、洋書を手掛かりに出発したものと思われる。

ところが、二人は同じ手がかりを取りながら、それぞれの生きてきた時代や素質の違いがあるためであろうか、二人における洋書で中国古典を読むことの本質はかなり相違性が現れてくる。芥川は西洋と東洋との絡み合いのなか、常に矛盾と分裂を感じながら悩んできた作家の一人である。それゆえに、東西をうまく融合したギリシャを一羽の「不死鳥」⁽²⁵⁾ に喩え、東洋と西洋の調和を常に望んでいた。芥川における『玉書』の受容はそのような一側面があると言える。

一方、近代化がどんどん進んだ時代のなかに生きてきた堀は、西洋そのものが血液の裡に染み込んでいるようなものである。芥川がかつて堀に「あれ以上ハイカラそのものを目的にするのは君の修業の上には危険だ」⁽²⁶⁾ との警告を与えた。西洋化の末に伝統としての「故郷」を失う喪失感から、かえって堀は晩年に「古典回帰」の時期を迎えることになる。が、「古典回帰」と言っても、西洋の存在が大きく介入していることは今までの先行研究でよく論じてきたところである⁽²⁷⁾。

つまり、堀における『玉書』の受容、さらに言うと、堀の晩年から芽生えた中国古典への関心というものは、一種の「西洋化」の結果であると言えよう。

(注)

1 芥川龍之介 「パステルの龍」 『芥川龍之介全集 第八巻』岩波書店 1996年（初出は1922年1月）

- 2 芥川龍之介『芥川龍之介全集 第八卷』岩波書店 1996年（初出は1922年）
- 3 劉娟『芥川龍之介研究』第12号 2018.7
- 4 芥川龍之介『芥川龍之介全集 第六卷』岩波書店 1996年（初出は1920年）
- 5 芥川龍之介『芥川龍之介全集 第二十三卷』岩波書店 1998年
- 6 『堀辰雄全集 第七卷（下）』（筑摩書房 昭和五五年六月）を参照。ノートの順番は全集に従ったもので、①～⑤の番号は本稿の説明便宜上付けたものである。また、()内にある内容は堀によるものではなく、全集の編集者が付けたものになる。ノート原本は堀辰雄文学記念館に所蔵されている。
- 7 『日本近代文学』第14集所収 1971年5月
- 8 「佳人—（佳人の嘆き）」、「戯題王宰相画山水図歌（王宰相の畫に題す）」、「新婚別（新婦の嘆き）」、「登高（秋の逍遙）」、「夢李白（放逐せられし李太白に）」、「春日憶李白（李太白を憶ふ）」、「玉華宮（古城址にて）」（注：()内は堀の訳詩題である。）
- 9 「堀辰雄・杜甫訳詩考」（『和洋女子大学紀要』1987年3月）
- 10 「ドイツ語の中の杜甫 堀辰雄の「杜甫訳詩」とのかかわりを中心に」（『関西大学東西学術研究所紀要』2015年4月）
- 11 「寄李十二白二十韻（李太白に）」、「野望（晩歸）」、「麗人行（舟上の美人）」、「秋興八首 其三（歎き）」、「秋興八首 其六（秋）」、「秋興八首 其八（痛ましき追憶）」、「贈衛八処士（若き日の友に）」、「秋興八首 其一（異郷の愁）」（注：()内は堀の訳詩題である。）
- 12 ・Couvreurs, S. J. 『Cheu King, Sien Hsien』（Imprimerie de la Mission Catholique, 1934.）
 ・Tizac, H. d' Ardenne 『L' Art chinois classique』（Henri Laurens, 1926.）
 ・Toussaint, Franz 『La flûte de Jade. Poésies chinoises』（Edition d' Art, H. Piazza, 1922.）
 ・Valéry, Paul 『Commerce』 「ヴァレリイ, 陶淵明」（Rédaction et Administrarion chez L. Giraud-Badin. 1929.）
- 13 edited by Teresa Seruya 2013 John Benjamins Publishing
- 14 堀辰雄 1941年1月20日 杉並成宗より 葛巻義敏宛書簡（『堀辰雄全集 第八卷』筑摩書房 1978年）
 「大へんな仕事になってしまひさうだが、山岸外史先生のやうに晩年の二三の作品以外は芥川全集は全部白紙、なんていふ性急な批評家も出てくるやうな時代だから、初、中期の作品から必然的に晩年の作品も發展してきてみるといふ事に目を向けさせる必要も充分あるかも知れず、また僕が引用文だけの芥川龍之介論を書くつもりでやつて見ても面白いと思ふ。」
- ・堀辰雄 1941年8月22日 軽井沢壺一四一二より 渋川驍宛書簡（同上）
 「芥川さんの事、只今の小生には何かと書きにくくてならないのです ちゃんとしたものを一つ書いて置いてから他のものも書きよくなるのでせうがいまのところ、何一つ書けないやうな気がするのです（後略）。」
- 15 堀辰雄「芥川龍之介論」『堀辰雄全集第四卷』所収 筑摩書房 1978年（初出は1929年）
- 16 堀多恵子 「ひとこと」『杜甫詩ノオト』 内山知也 1975年12月 木耳社）
- 辰雄が中国の文学に心を向け始めたのはいつのころからなのだろうか。まず思うことは、まだ学生だった時に芥川龍之介全集の編纂を手伝い、卒業論文に「芥川龍之介論」を書き、執筆年代ははっきりしていないが「芥川龍之介の読書」と明記したノオトを残していることである。このノオトなどは、もう一度「芥川龍之介論」を書かなければならないとよく生前言っていたことから思わせると、その準備のためだったのかもしれないが、芥川先生が亡くなられた昭和二年から遡って小学時代に至るまで、作品や書簡から読まれた書籍を調べていったものようである。そうした勉強で如何に芥川先生が中国文学に造詣が深かったかを知り、いつの日にか自分も思ったことだろうと私は思う。

- 17 堀辰雄『堀辰雄全集 第七卷（下）』 筑摩書房 1980年
- 18 同上
- 19 芥川龍之介『芥川龍之介全集 第十九卷』 岩波書店 1997年
- 20 芥川は「上海遊記」（初出：『大阪毎日新聞』朝刊及び『東京日日新聞』 1921. 8. 17～9. 21連載；『芥川龍之介全集 第八卷』1996. 6 岩波書店）で「私はこう云う神経作用に、祟られたくない一心から、昼は満鉄の井川氏やジョオンズが親切に貸してくれた、二十冊あまりの横文字の本を手当り次第読破した。ラ・モットの短篇を読んだのも、ティッチェンズの詩を読んだのも、ジャイルズの議論を読んだのも、悉この間の事である。」と述べる。
- 21 芥川龍之介『芥川龍之介全集 第二十三卷』岩波書店 1998年
- 22 「澄江堂遺珠」関連資料・後記 『芥川龍之介全集 第二十三卷』岩波書店 1998年
- 23 堀辰雄文学記念館（軽井沢）にある堀旧蔵書を調べた結果、『詩経』（岡田正三訳 1936年1月 第一書房）では、『Cheu King, Sien Hsien』（Couvreurs, S. J., Imprimerie de la Mission Catholique, 1934.）にあるフランス語訳詩を書き込んでいることが分かった。
- 24 堀は「芥川龍之介論」で、「彼は僕のなかに深く根を下ろしている。」「彼を冷静にみるためには、僕自身を冷静に見なければならぬ。」などと唱える。
- 25 「文芸的な、余りにも文芸的な」（『芥川龍之介全集 第十五卷』岩波書店 1996年 「初出は1927. 4～6」）
- 26 1925年7月20日堀辰雄宛書簡『芥川龍之介全集 第二十卷』 岩波書店 1997年
- 27 大森郁之助「堀辰雄に於ける所謂日本回帰の虚実」（『札幌大学教育部・短大部紀要』第13号 1978. 8）などの論に散見。

「研究科プロジェクト」成果報告書
『日本文学を世界文学として読む』

平成三十一年（二〇一九）三月三十一日発行

編集 山本 真由子

発行 大阪市立大学大学院文学研究科
都市文化研究センター

〒五五八―八五八五

大阪市住吉区杉本三―三―一三八

電話〇六―六六〇五―三一―一四

印刷 博進印刷株式会社

〒五五九―〇〇〇二

大阪市住之江区浜口東二―七―二四
